

徳富 蘆花

とくとみ ろか 作家 1868.10.25 - 1927.9.18 熊本県水俣に生まれる。徳富蘇峰の弟。真率に自己を露呈した作品や行動により、時代の良心や知性に豊かに働きかけた優れた文学的存在として、時代を経るにつれ声価を不動のものにした。掲載作は、明治三十九年(1906)十二月十日第一高等学校に招かれて試みた一場の演説。語り終えて満場寂として声なく異常な感動を与えた。日露戦争勝利後の媾和に不満不穩を極めていた日本国民に、痛烈に急所を説いて余さず、後の大逆事件に触れて本館掲載の「謀叛論」と並び、蘆花の精神の最も発露した言説は、自ずから戦争の悲哀に言い及んで過たない。

勝利の悲哀

—

本年七月初旬、生(せい=自分)は聖彼得堡(せんとびーたーすぶるぐ)の亜歴山(あれきさんどる)三世博物館に於て、露国の画家エ`レスチャギンの油絵数多(あまた)見るの機会を得たり。エ`レスチャギンは生涯非戦的絵画を描き、一昨年露艦ペトロパウロスクの我敷設(がふせつ)水雷にかゝり轟沈(ぐわうちん)せられし時、提督(ていとく)マカロフと共に乗組み居て海底の水屑(みくず)と消えしは皆人(みなひと)の知る所。其数ある油絵の中に就て、一つ殊に生の忘れ得ざる画(ぐわ)あり。

其(そ)は奈翁(なぼれおん)が雀が丘に立ちて莫斯科(もすくわ)を眼下に眺むるの画也。佛蘭西兵士は銃剣の尖(さき)に帽を振廻はして万歳(ばんざい)を叫び、奈翁(なぼれおん)は例のナポレオン帽に大外套(おほぐわいたう)、眼鏡(めがね)持ちし手を背後に組み、默然(もくねん)と莫斯科を眺む。莫斯科は夢の如く眼下に隠見(いんけん)し、而(しか)して何の煙にやあらん一団の蓬々(ぼうぼう)たる者斜に奈翁を掠めて、全体の画に「夢」の

感を与ふ。エ` レスチャギンの命意如何(いかん)を知らざれど、生は髣髴(はうふつ)として茲(ここ)に勝(かつ)の哀(かなしみ)、即ち勝利の悲哀を認めぬ。数日の後莫斯科(もすくわ)に到り、雀が丘に遊ぶ。莫斯科より約一里、莫斯科川其下(そのした)を流れ、旧都は一目(いちもく)の下にあり。こゝに立ちて、エ` レスチャギンの画を憶(おも)ひ起し、百年前此処に立ちし奈翁(なおう)の胸中を想ふに、其心臓の鼓動百年を隔てゝ吾耳(わがみみ)に何ものをか囁(ささ)やく。何ものとは何ものぞ。勝利の悲哀也。彼れ欧州を脚下に蹂躪(じゅうりん)し、思ふ所殆んど意の如くならざるなく、唯(ただ)英国の海に抛りて吾に抗し、而してこれと結べる露国の北に嶠(ぐう)を負(お)ふあるのみ。其(それ)此(これ)を御(ぎよ)するは即ち彼を挫(くじ)く所以(ゆゑ)なり。こゝに於て軍を興す四十万、潮(うしほ)の如く露国に浸入し、ポロデノはやゝ苦戦なりしも、終(つい)に露軍を追退(おひしりぞ)けて、眼ざす莫斯科(もすくわ)を早や眼下に望む。意気正に天を衝(つ)くべき筈也。されど雀が丘の奈翁は勝ち誇りたる奈翁にはあらざりき。彼は確(たしか)に心中の欠陥を感じぬ。其目的は成るに垂(なんな)んとして、甚だつまらなき感を覚えしに相違なし。ほつとつきし息は安心の吐息のみにあらざりき。彼は千辛万苦、懸軍長駆の結果、こゝに止まる乎(か)と一瞬時(いちしゆんじ)の悲哀を感ぜしなり。

彼は確(たしか)に勝利の悲哀を感じ、満足の不満を感じ、夢の如き果敢(はか)なさを感じたりき。然(しか)れども斯(こ)は瞬時に消えて、再び我(が)強き彼に復(か)へれり。彼は莫斯科に入りぬ。而して後(のち)雪中の退軍、而して総崩れ、而してエルバの島流し、而してヲートルロー、而してセント・ヘレナ、而して死。死して彼は終に悟らざりき。雀が丘の一瞬時は彼が生涯の大転換期なりしを見ず見ず逸して彼は終に「肉我」の餌食(えじき)と身をなして、其生涯は華麗なる而して果敢(はか)なき夢に終りぬ。

二

生は思ふ、児玉源太郎将軍が奉天戦後の心機まさに雀が丘の奈翁(ナポレオン)に類するものありしにはあらざる乎(や)。事實は知らざれど、世は将軍に遁世(とんせい)の志ありしと伝へぬ。彼は確に胸中或煩悶(はんもん)を覚えしなり。此(こ)は彼が大悟の機なりき。然れども世は彼に迫るに参謀総長の職務を以てし、彼は行きがかりを捨つる能(あた)はず、さりとして胸中の或煩悶を忘るゝ能はず、もとより好める紅燈緑酒(こうとうりよくしゆ)の場は其悶々を紛ぎらす可(べ)く彼のしばしば出入る所となりて彼は突然死の手に拉(ら)つし去られぬ。生は露国の帰途、浦塩斯徳(うらじおすとつく)に於て、其

死を耳にせし時、可惜（あたら）好男児、彼は日露戦争に殉死（じゆんし）せり。彼は悟らんとして悟り得ざりき、と嘆息するを禁じ得ざりき。あゝ彼は其脳中の煩悶を国民への遺物として逝（ゆ）けり。

三

豈（あに）たゞ児玉源太郎のみならんや。日露戦争の終局に当りて、一種の悲哀、煩悶、不満、失望を感ぜざりし者幾人かある。

我等をして自白せしめよ。我等は北方の巨人を恐れたり。彼を悪（にく）めり。遼東還附（れうとうくわんぷ）以来は彼を俱不戴天（ぐふたいてん）の仇（あだ）と睨（ね）めり。機会もあらば一太刀（ひとたち）怨みんと齒を喰ひしばれり。日露戦争の発端（ほつたん）何（いづ）れにあるを問ふをやめよ。当初より彼は割合に呑気にて、我は必死の覚悟なりき。我（わが）憤怒（ふんゑん）は強く、我頭腦の回転は彼よりも素早し。戦（いくさ）は生まれり。旅順も終（つい）に陥りぬ。奉天は大勝なりき。日本海の全勝は東郷大将をして英雄ネルソン提督と争はしむるに到れり。日本の武名は揚れり。怨（うらみ）は血を以て報いられたり。勝利、勝利、大勝利、而して後（のち）彼（か）の媾和談判。

今日に於て旧創（きうさう）を発（あば）くは烏滸（をこ）のわざ也。然れども彼（か）の媾和当時に於ける日本国民の心的情態は寧（むし）ろ研究に値（あたひ）せざらんや。彼の媾和に関する騷擾（さうぜう）を以て、単に失業者の乱暴、弥次馬の馬鹿騒ぎと看做（みな）し去るはあまりに浅薄（あさはか）也。日本は此（これ）怨恨（ゑんこん）と力味（りきみ）たり。而して其（その）怨恨や、霽（は）れて見れば、甚だ呆気（あつけ）なく感ぜしなり。日本は勝利、勝利に酔ひぬ。而して其勝利も実は当の露西亜を平身低頭せしむる能（あた）はず、却て我は已（すで）に力の終（をはり）に近づかんとし、彼はこれより力を出（い）ださんとするの気はひを感じては、其勝利なるものの案外果敢（はか）なく不慥（ふたしか）にして、戦争の結果は心地よく割り切れず、所詮上帝の帳簿（ちやうぼ）に心残らぬ清算の記入をなし得ざる其悶々（そのもんもん）が破裂せしのみ。而して此悶々は株式の繁盛に関せず、強国伍入（ごにふ）の奥印濟（おくいんずみ）に関せず、猶（なほ）国民の胸に残れり。此残れる悶々は即ち日本の前途を支配するの力なるを知らずや。

四

人は無限を恋ふ。無限を恋ふ人間の有限に撞見（たうけん）する時、こゝに悲哀あり。敗北も悲哀なり。勝利も亦悲哀なり。全き勝利も悲哀也。全からざ

る勝利も亦悲哀也。歡樂極(きはまつ)て哀情(あいじやう)多きも其限界に達すれば也。怨を霽(はら)して意氣索然(さくぜん)とせるも、「我」が其限界に達すれば也。有限の悲哀は即ち無限の追求を意味す。

「神は永遠を思ふの念を人に授け玉へり」。吾力(わがちから)の限(かぎり)に達する時、吾線(わがせん)の端(はし)に立つ時、吾が追ひしものたゞ影なるを悟る時、吾事業の畢竟(ひつきやう)水の泡に齊(ひと)しきを認むる時、身の夢なるを悟る時、こゝに金牀玉几(きんしやうぎよくき)も人を眠らしむる能はず、妻子珍寶(ちんぱう)も吾を慰むる能はず、全世界をあげて方寸の空所を満たす能はず。斯時(このとき)の悲哀、何ものか測るを得む。而して斯れ「真義」が「仮我」に眼を開けと促すの声なるを知れ。

奈翁(ナポレオン)は雀が丘に其声を聞いて聴かざりき。兎玉將軍も其囁(さゝやき)に腸をかきむしられて、悟らで逝(ゆ)きぬ。此声(このこゑ)今、日本国民の耳に猶囁きつゝあり。あゝ寤(さ)めよ。我(わが)愛する日本、我(わが)故国日本、眼を開いて真の己(おのれ)を知れよや。

五

戦後の経営、世界的日本の発展、是れ耳やかましく唱道せらるゝ語也。(日清日露=)戦後の日本は成程大いに発展しつゝあるものゝ如し。陸軍は師団を増設せんとし、海軍は続々大艦を造る。南滿(=洲)の経営は大仕掛に始まらんとす。彼我(ひが)の使臣は多く格(かく)を大使に上(のぼ)しぬ。曾(かつ)て治外法権に憤涙(ふんるゐ)を抑へかねし日本は、前後三年の征戦(せいせん)を経て、其貪り求めし一等国の伍伴(ごはん)に入(い)れり。

あゝ日本よ、爾(なんぢ)は成人せり。果して成長せる乎(か)。否々(いないな)爾(なんぢ)は人の妬辞諛辞(とじゆじ)に耳傾くる前に、先づ退(しりぞ)いて静かに神の前に「己(おのれ)」を觀ざる可からず。

爾(なんぢ)の独立若(も)し十何師団の陸軍と幾十万噸(トン)の海軍と云々(うんぬん)の同盟とによつて維持せらるゝとせば、爾の独立は実に愍(あは)れなる独立也。爾の富(とみ)若(も)し何千万円の生糸(きいと)と茶と、撫順(ぶじゆん)の石炭と、台湾の樟腦(しやうなう)砂糖にあらば、爾の富は貧しきもの也。爾が所謂(いはゆる)戦勝の結果は爾を如何(いか)なる位置に置きしかを覚悟せりや。一方に於ては、白哲人(はくせきじん)の嫉妬、猜疑、少なくも不安は、黒雲の如く爾を目がけて湧き起り、また起らんとしつゝあるにあらずや。一方に於ては、他の有色人種は爾が凱旋喇叭(がいせんらつぱ)の声に恰(あだか)も電氣をかけられたるが如く勃々(ぼつぼつ)と頭を擡(もた)げ起し来(きた)れるにあらずや。此両間に立つて、爾は如何にして何をなさん

と欲する乎(や)。一步を誤らば、爾が戦勝は即ち亡国の始とならん、而して世界未曾有(みぞう)の人種的大戦乱の原(もと)とならん。是れ豈(あに)爾(なんぢ)が發展々と足を空に心を浮かしてから騒ぎに盲動すべき時ならんや。

寤(さ)めよ、日本。眼を開け、日本。皇天の爾(なんぢ)に期待し玉ふ所は、屑々(せつせつ)たるものにあらず。夢の如く、水の泡(あわ)の如きものにあらず。大義を四海に布(し)くは爾(なんぢ)の使命也。平和の光を日の如く輝かすは爾の任也。爾の武力を恃(たの)まずして爾の神を恃め。爾の罪を悔(くひ)改めて爾が武を洩(けが)したるの罪を世界に謝せよ。爾の大誠意を腹の底より振起(ふるひおこ)して、之を世界の同胞の心腹に置けよ。爾はしばしば天佑を呼べり。然も爾は未だ神を識らず。爾は勝利の悲哀を感じ。然も未だ其求むる所のものを知らず。爾(なんぢ)父なる神の前に脆(ひざまづ)いて、平伏して、其(その)指導を仰がざる可からず。

日本国民、悔(くひ)改めよ。

(明治三十九年十二月二十五日発行黒潮第一号)